

聖書:エペソ人への手紙2章1～10節

説教:信仰によって救われたのです

はじめに

これまでのことを簡単におさらいすると、私たちはキリストの血による贖いによって罪の赦しをいただいたということ、また神の国を受け継ぐ相続権と、それを保障するために聖霊をいただいていることを確認しました。しかし、いずれも目で見えないのでピンとこない。そこでパウロは教会を見るようにと奨めます。教会のかしらはキリストで、キリストのからだは教会である。いろいろな形をした様々な器官が結び合わされてひとつのからだが生き生きと活動するように、教会もさまざまな個性と賜物を持った人たちが集まり、ひとりひとりが結び合わされて、そこにキリストが生きておられる。そこを見なさいということをお話してきました。

そんな教会に今私たちは集められているわけですが、では私たちはかつてどのような者であったのか、どのようにして救われたのか、そして今私たちは何をしているのか、そのことを次に見ていきます。

1 かつて私たちは

1) 自分の罪の中に死んでいた

救われる前、私たちがどのような者であったのか、パウロは三つ挙げています。一つ目は1節。「あなたがたは自分の背きと罪の中に死んでいた者であった。」

私ごとですが、昨年の暮れに学生時代に寮に住んでいた時の三人の友人が札幌に来るというので、教会でお弁当を食べながら話をすることになりました。会ってみればそれはそれで楽しい時間ではあったのですが、どこかに苦いものが残った感触がありました。というのはあのころ自分は、とても人様に大きな声で言えないような、罪に満ちたことをしていた。そのことを思い出してしまって傷が疼いてしまう。罪の中に死んでいました。まさにみことばのとおりです。

2) 不従順の子らの中にあつた

では、その死んでいた歩みはどのようなものであったのか。それが二つ目のことで2節にある。「かつては、それらの罪の中にあつてこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者、すなわち、

不従順の子らの中に今も働いている霊に従って歩んでいました。」

「空中の権威を持つ支配者」とは何か。日本語にある「空気を読む」と言い方、これが一番ふさわしい。この世界の空気がなにかによって支配されているという感覚です。一体何によって支配されているのか。不従順の子らに働く霊とあります。つまりキリストを否定する霊と言ってよいでしょう。そんな霊的な存在がこの世界を支配している。いったいどのようにして支配しているのか。

3) 肉と心の望むことを行っていた

それが三つ目で、3節にあります。「私たちがみな、不従順の子らの中にあつて、かつては自分の肉の欲のままに生き、肉と心の望むことを行い、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。」身の周りには宣伝、公告があふれ、私たちの肉と心の働きかけをします。これを買いなさい、そうすればあなたは幸せになれると言う。周りはこんな空気で一杯です。でも結局それらは偽物ですから、買っても本当の幸せにはなれません。それでまた新しいものを買うことを繰り返す。この霊は私たちの目をごまかして、本当のいのちがあるキリストが見えないようにと働く。その結果、人間は霊的に死んでしまった。これがかつての私たちの姿でした。

2 しかしいまは

1) キリストとともに

そんな私たちが救われていまいどうなったか。5, 6節。「背きの中に死んでいた私たちを、キリストとともに生かしてくださいました。あなたがたが救われたのは恵みによるのです。神はまた、キリスト・イエスにあつて、私たちをともによみがえらせ、ともに天上に座らせてくださいました。」

ここをよく見てみるとこうなっている。「生かしてくださいました」、「よみがえらせてくださった」、「天井に座らせてくださった」。これから将来こうなるでしょう、ではありません。全部、すでに起きたこととして語っています。でもおかしいですね。私たちはまだよみがえっていないし、まして天の御国に入っていない。すでに起こったような言われ方をされると戸惑います。どうしてパウロはこんな言い方をするのでしょう。

## 2) パウロ

これはパウロが体験したことと関係しています。彼は、パリサイ派の若きエリート指導者として、クリスチャンを迫害することに情熱を注いでいた人です。クリスチャンを迫害してこの世から一掃してしまうことこそ、神に喜ばれるよい行いであると信じて疑わな。言わば、彼はがりがりのユダヤ教原理主義者ですから、破壊工作、脅迫、拷問、デマによる情報操作、なんでもありの過激な行動をどんどんしていく。ところが、クリスチャンを逮捕するためにダマスコに向かう途上で、太陽よりも強い光に打たれて倒れてしまう。そこで、「パウロ、パウロ、どうしてわたしを迫害するのか」との声を聞き、「主よ、あなたはどなたですか」とのパウロの問いかけると、その声は「わたしは、あなたが迫害しているナザレのイエスである」との答える。

パウロにとって衝撃的なことばでした。彼は、神を愛するがゆえに、その愛を実践するというところで、クリスチャンを迫害した。ところがそれが、神を迫害していたことになった。律法によれば死罪です。これは決定的です。ではパウロはそこでさばかれて死んだのか。

そうではない。イエスは、地面に倒れているパウロを起こして、キリストの死とよみがえりを伝えるようにと新たな召しを与えて送り出していきます。死罪と言われた者が、罪を赦されてキリストの死と復活を伝える者に変えられる。パウロにしみれば、死んでいた者が救われて、新しいのちに生かされている。これは紛れもない事実です。なので彼にとって、よみがえりは未来のことではなく、あの日自分の身に起きたこと。そうして、こんどは神の福音を伝える者となる。天上に座ることがすでに決まっているから、そのような役割を与えられている。彼にとっては、将来のことではないのです。自分自身が経験している、生きた現実だったのです。

## 3) もう死ぬことがない

それはパウロだけの特殊なことではない。6節をもう一度読みます。「神はまた、キリスト・イエスにあつて、私たちをともによみがえらせ、ともに天上に座らせてくださいました。」「よみがえらせ」と言うからには、以前は死んでいなければなりません。「(あなたがたがは、かつて)自分のそむきの罪と罪の中に死んでいた。」死んだので、よみがえる。そういう順番です。ここに注目してください。

私たちは「いつか死ぬ」と考えています。でも今日の箇所によれば、私たちはすでに死んでいたと言われる。それがキリストとともによみがえらせていただいた。そのいのちで今生きている。それで、どういうことになるか。実感がないかもしれませんが、実は私たちはもう死ぬことはないと言われている。私たちは、すでに天上の椅子にキリストとともに座っている。目には見えないけれど、すでにそういう身分だと言われるのです。このことをころから信じられるなら、すばらしい。医師から余命宣告されても、なにも動揺しない。これまでと同じように穏やかに過ごせるはず。そうは言っても、なかなか信じられないので七転八倒するとは思いますが。

## 3 信仰によって

### 1) 行いではなく

それはそれとして、こんなすばらしいものをどうして私たちはいただくことができたのでしょうか。信仰によって、です。8節後半にあります。「それはあなたがたから出たことではなく、神の賜物です。」ただ、信じるということひとつでいただいた。ところが世の人々は言います。「救いは、人間の努力と精進で勝ち取るものである。」パウロもかつてそう思っていた。それで一生懸命クリスチャンを迫害した。その結果、神を迫害することになってしまった。これは単なる皮肉ではない。大切な真理を教えています。人が努力で救われるという発想が、いかに間違っているかです。人が努力すればするほど、救いから遠ざかるものである。そういうことを教えている。神を迫害するというとんでもないことをしていたパウロが、それでも救われていく。どうしてですか。神の恵みによってです。信仰によってその恵みを信じて受けとめた。皆さんも同じように信じて救われました。

### 2) 良い行いをするために造られた

さて今日のはなしは、これで終わるわけにはいかない。10節のことがどうしても引っかかります。「実に、私たちは神の作品であつて、良い行いをするためにキリスト・イエスにあつて造られたのです。神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをあらかじめ備えてくださいました。」

皆さん焦りませんでしたか。「もっと良いことをしないと神さまに叱られる。」「信仰によって救われるといいながら、やっぱり行いが必要ということか。」実際はどうなのでしょう。

「良い行いをするために造られた」とあります。それで皆さん勘違いする。「だから、私たちは良い行いをしなければならぬ。」よく考えてください。神は、いったいどのような方なのでしょう。かつて私たちが罪に死んでいたとき、確かに神は悲しんでおられました。それで神の大きな愛が注がれて、私たちは救われた。問題はその後です。

「神のご恩に報いるために、努力して良いことをしよう。」真面目な皆さんはそんなふうを考えるでしょう。いいですか。良い行いは、すでに備えられているのです。それを信じてください。備えられているのですから、まったく無理をする必要はない。ではどうするか。ただ神に救われたことを喜んでいれば、自然に内側から、神が供えてくださったものがあふれてくる。それでいい。そんなものが私の中にあるのだろうか？自分では分からないのです。でもほかの人には分かる。

信じられないでしょうか。がんばってとか努力とか、そういう発想をするなら、結局かつてのパウロと同じ。いつの間にか神を迫害する側に回ってしまう。そんなことにだれもなりたくないでしょう。なので「努力」「がんばり」は捨てます。

でもそれは何もしないというのとは違う。することはただ一つ。簡単です。自分がどこから救われたのか。思い起こすだけです。かつて自分がどんな歩みをしていたか。そこからどんなふうに変えられたのか。それを思い出していく。そうしたら、だれでも神をほめたたえたいくなるでしょう。「神が備えてくださった良い行い」とは、そのことです。神はすばらしいなど、言えたなら、それだけであなたは良い行いをしている。まさに神が備えてくださったことです。それ以外に何も私たちは持っていない。

この方とともにまた歩んでまいります。